

今年度のニュースレターをお届けします。

今年度より研究実践プロジェクト「過去と未来をつなぐ～危機の乗り越えに向けて」を開始いたしました。「『社会による子育て～ソーシャルベダゴジー』の概念のもとに進める、『子ども・子育て』に関する研究・実践」「トラウマ（戦争、災害、虐待、暴力等）、人生史、記憶を対象にした、思想、心理学、アート、歴史、社会学などによる学際的研究」「人間科学の哲学的・思想的基盤を検討する研究。特に、甲南大学の財産である九鬼周造文庫を生かした、図書館とも連携して行う九鬼思想の研究」の三つの主題を軸に活動を行ってまいります。

しかし、今年度は、新型コロナウイルス感染症のため、本来予定していた活動の多くが中止、あるいは形を変えての開催となりました。

年度内に開催予定の6件を除く、5件の活動について、企画者（あるいは講演者）の先生にご報告いただいております。ご味読ください。





活動報告

●2020年度の活動

公開講座（オンライン開催）

第11回 お父さん・お母さんのための子育て応援講座 「子どもの安心基地になるために」

日 時：2020年10月15日(木) 10:30～11:30

オンデマンド配信期間：2020年10月29日(木)～2020年11月4日(水)

講 師：北川 恵（甲南大学文学部教授／公認心理師・臨床心理士）

スタッフ：岩本 沙耶佳（甲南大学心理臨床カウンセリングルーム相談員／公認心理師・臨床心理士）

参 加 者：17名(内訳：同時双方向型5名(甲南大学学生4名、一般1名)、オンデマンド配信12名(一般12名))

子どもは、お父さん・お母さんが「安心基地」になってくれることで、不安なときは信頼できる人を頼りながら、自分でいるいろいろな挑戦をすることができるようになります。本講座は、そうした関係を築くうえで大切なポイントをお伝えするために、毎年開催してきました。今年度は、新型コロナウイルスの感染が拡大している状況をうけて、春の開催予定を秋に延期し、その後、Zoomを用いてオンラインで開催することにしました。例年のように託児を併用した対面での開催はできませんでしたが、オンデマンド配信も併用したことで、当日の都合が悪い方にも視聴いただけました。参加者からは、「遠方のため、Zoomで受講できてよかった」「アタッチメントの大事さに気付くことができた」といった感想や、過去にも参加くださった方から「日常生活ではつい忘れがちになってしまうが、こうしてリピートしてお話を聞くことで自分の身につけてくせづけしたいと思う」といった感想を寄せて頂きました。日々、子どもに向き合っている親にも「安心基地」が必要です。来年度も子育て応援講座の開催を予定しています。（報告者：北川 恵・岩本 沙耶佳）



【開催中止】第12期 親子がホッとつながるグループ2020

実施責任者：北川 恵（甲南大学文学部教授／公認心理師・臨床心理士）

ファシリテーター：岩本 沙耶佳（甲南大学心理臨床カウンセリングルーム相談員／公認心理師・臨床心理士／「安心感の輪」子育てプログラム認定ファシリテーター）

甲南大学人間科学研究所では、「親子がホッとつながるグループ」というグループ活動を毎年行っています。2020年度も、アメリカで開発された親子関係支援「安心感の輪」子育てプログラム(全8回)を行う予定でしたが、新型コロナウイルスの感染が拡大している状況を鑑みて、開催を中止しました。来年度は、感染状況によってはオンラインで同プログラムを行いたいと考えています。子どもを理解し、安心感を与える関わりについてのヒントになるようなDVDを見ながら、ファシリテーターと一緒に話し合います。保護者の皆様にもホッといただける場になることを願っています。参加者募集を年度初めに行いますので、ぜひご参加・お問い合わせください。（報告者：北川 恵・岩本 沙耶佳）

子育てライブラリー2020

人間科学研究所では子育て支援の一環として、絵本や紙芝居、育児関連の本を読むことができる場所を地域の子育て中の皆様に開放する「子育てライブラリー」を開催しています。2019年度の4月と8月に2回開催した内容については人間科学研究所ニュースレターVol.37に報告したとおりです。2020年3月7日に開催を予定していた2019年度第3回子育てライブラリーは、新型コロナウイルスの感染が拡大していたために中止となりました。2020年度は、例年のような対面での開催が難しい状況が続いていますので、ご家庭で楽しんでいただけるような動画コンテンツを作成し、配信したいと準備をしています。（報告者：岩本 沙耶佳・北川 恵）

世代間交流体験

大学生による親へのインタビュー

実施担当者：北川 恵（甲南大学文学部教授）・岩本 沙耶佳（甲南大学心理臨床カウンセリングルーム相談員）・木下 雅博（人間科学研究所博士研究員）

参 加 者：母親4名、本学学生4名（「心理地域援助」受講学生：内藤 美咲、阿部 愛海、岩元 実佳、柳 果歩）

大学生が、働き・育てることへの多様なモデルに触れながら、ライフプランを描く機会となるように、人間科学研究所では大学生が乳幼児や親と交流する機会を設けています。その一つとして、2018年度から、大学生が、子育て中の親に「働くことと育てること」についての経験を尋ねるインタビューを行ってきました。



2020年度は、4名の学生が、4名の母親にインタビュー（オンラインで実施）をしました。また、2018年度に行った8名の母親のインタビューについて、語られた内容をカテゴリーへと整理しました。その結果は表1の通りでした。

表1. 子育て中の親へのインタビューで語られた内容の整理

働くことについての経験

よかったこと：収入、仕事の楽しさ、やりがい、社会とのつながり、バランスとれる

大変だったこと：多忙、ストレス・失敗、仕事の悩み、特になし

大変さへの対応：他者とのかわり、完璧を求めない、健康増進、努力、我慢、退職

育てることについての経験

よかったこと：かわいい・楽しい、子との時間、子や自分の成長、生まれてくれたこと

大変だったこと：忙しい・体力いる、子へのかわり方、助けがない、大変さは感じてない

大変さへの助け：息抜き・人との交流、考え方の工夫、子どもからの言葉・態度

働くことと育てることのバランス

どのように決めたか：

<専業主婦> 仕事をする問題・不安、家事・子育てへの関心、辞めてもまた働ける

<パートタイム> 時間的に可能な仕事、在宅でできる仕事

<フルタイム> 育休の活用、絶対に無理はしないで両立

現在のバランスで満足していること：

<専業主婦> 子どもとのかわりの多さ、一時保育の利用、現在も難しい

<パートタイム> 収入、自分の成長、子の成長・子との時間

<フルタイム> 収入、会社の制度を活用できる、働く姿を子に見せることができる

現在のバランスで大変なこと：

<専業主婦> 余裕のなさ、息抜き・人との交流の少なさ、子どもとの衝突

<パートタイム> 理想と現実のギャップ

<フルタイム> 周囲に頼りづらい環境、時間・職場とのジレンマ、子へのかわり方

大変さへの助け・対応：

<専業主婦> 周囲を頼る、自分の時間をみつける、子を通じた社会とのかわり

<パートタイム> 仕事がストレス発散、今もまだ課題

<フルタイム> 周囲の人の助け、自分にはできないことを優先

本活動に参加した学生からは、次のような感想が報告されました。まず、インタビューや語りの整理を通して、「子育てへの憧れが前より大きくなった」「働く方がいいという思いになった」という自分の将来への思いに影響を受けたり、「専業主婦には息が詰まるといった苦労があることを知った」「仕事の有無は経済的事情によると思っていただけ、自分のバランスを保つという視点に驚いた」など、新たな気づきを得られたりしました。子育て中の親にもつ

と聞きたかったこととして、「家事育児の助けになるサービス(場所、施設、機関)ってどのようなものがあるのだろう」「知人などをどのように頼っているのだろう」「実家が遠方の人はどうしているのだろう」といった、子育てサポートについてのさらなる疑問や、「仕事を続けている人のパターンをもう少し聞きたい」「子育て中の母親の生活リズム(息抜きの時間を含む)を知りたい」といった実態にもっと迫りたいという思いも高めたようです。

これからも本活動を継続し、インタビュー内容の整理を続けていくことで、学生が多様なモデルに触れる機会としていきたいと考えています。インタビューにご協力いただける子育て中の父親・母親も募集しています。

(報告者:北川 恵)

シンポジウム (オンライン開催)

「2010年代アニメにおけるトラウマと最終戦争の表象——『魔法少女まどか☆マギカ』から『ケムリクサ』まで」

日時: 2020年8月26日(水) 13:00~16:00

場所: オンライン

企画・司会: 森 茂起 (甲南大学教授・人間科学研究所所長)

講師: 齋藤 環 (筑波大学教授)

足立 加勇 (学習院大学非常勤講師)

川口 茂雄 (甲南大学准教授)

コメントーター: 上尾 真道 (京都大学研究員)

過ぎ去ろうとしないトラウマの記憶。来たるべき未来の破滅への恐れ。戦後日本の社会・文化・芸術に意識的にせよ無意識的にせよ潜在し続けてきた主題である、戦争の現実ないし戦争・戦いという表象をもちいる表現に坎して、2010年代のアニメ作品はどのようなかたちをとってきたか。そして過去の時代の作品——アニメ以外の表現分野をも含めて——との関係性においては、どのような連続性と非連続性の位置にあるのか。それとも《終末》への黙示録的な恐れは、すでに《終末》以後をかるうじて生き延びているだけという意識へと変容したのか。そして《女性》表象の戦後70年間での変遷、キューバ危機以後、リーマン・ショック以後の変化はそこにどう切り結んでいるか。

以上のような問題意識のもと、2011年の作品『魔法少女まどか☆マギカ』の再検討を中心主題としつつ、上述の諸問題を再考しようとするものとして、このシンポジウムは企画された。『まどか』や『Steins;Gate』などに代表される2010年代深夜アニメの文化的意義・芸術的意義の研究という、新たな学的課題への着手となることもあわせて意図されている。

ポピュラー文化への洞察・批評を含め多分野での活躍で知られる精神科医の齋藤環氏、著作『日本のマンガ・アニメにおける「戦い」の表象』で先般日本アニメーション学会賞奨励賞を受賞した足立加勇氏を講演者として招き、コメントーターをラカンをはじめとする精神分析・現代思想の専門家である上尾真道氏が務めるという、豪華な登壇者が一堂に会するイベントとなった。

新型コロナウイルス対応のためにやむをえず、当初企画された東京での公開シンポジウムを公開ウェブセミナーに変えて開催することとなった。不便やニュース伝達の困難という側面がやはり否みがたくあった一方で、幅広く各地から参加者が集うという有意義な側面もあった。

最初に、齋藤氏による発表「『魔法少女まどか☆マギカ』におけるキャラクターの存在論」がおこなわれた。氏がこれまでに著わしてきた著名なアニメ作品論・アニメ文化論を振り返りつつ、「政治的に正しい多型倒錯」を提示する「ポスト魔法少女」「ポスト戦闘美少女」作品としての『まどか』について改めて注釈をほどこし、くわえて、現在の世界的な文脈のなかでいわゆる日本のアニメというものがどのように位置づけられるかを問うという、スケールの大きい発表が展開された。日本のアニメの特徴を「感情の強さ」とあると指摘し、そのうえで「精神病」的な存在としての「魔法少女」を描く『まどか』の特筆すべき点を、物語というものが「感情消費システム」であり、アニメが感情のメディアであることに作品そのものが自覚的であることに見て取りうることなどが指摘された。

続く足立氏による発表「戦後マンガ・アニメにおける敗戦の継承と『まどか☆マギカ』」では、『まどか』を批評性が高い作品として評価する複数の論評(たとえば荻上チキによる、第3話にかんしての「過去の作品群」に挑戦状を叩きつけている作品」との評言など)の参照確認から出発しながら、しかしマンガ・アニメのキャラクターという記号的なものがストーリーのなかで傷つき死んでいくことに特別な意義が見出される表現・作品は歴史的に過去に遡られることを指摘し、戦時中の手塚治虫のマンガ習作を起点として、戦後1960年代に決定的になってきた、反戦運動の高まり、第二次大戦の敗戦の再確認と戦う理由・正当性の繰り返される問い直し、消費者層の拡大によ



るテレビアニメや劇画の内容面での変化、といった諸要素の歴史的視野での吟味が発表において展開された。そうした吟味ののちに、作品内容の具体的な検討として、『サイボーグ009』と『まどか』との比較がおこなわれ、「サイボーグ戦士」と『魔法少女』との置かれている状況の差異が分析された。

最後の川口発表「『魔法少女まどか☆マギカ』とカラストロフ、女性、「願い」、そして男性」では、齋藤環氏の著書『母は娘の人生を支配する』にも触れつつ、まどかの母という存在に着目して『まどか』作品が解釈された。ピカソの『ゲルニカ』は非写実主義的に戦争を表現した視覚芸術としてよく知られるが、そこにはなお「前線の戦闘員=男性」と「受動的な犠牲者=女性」という図式も見いだされる。21世紀日本社会における、職業選択や自己実現の自由というよりは市場経済の駒・歯車になることを単に強いられる側面を帯びての女性の社会進出の本格化は、『戦闘』『戦争』の表象における女性的存在の位置づけ・意味づけに変更を促していると指摘された。『まどか』においては最終的にまどかの行為は、グローバル市場経済のなかカラストロフに向かって突き進み疲弊する女性たちを救い、まどかの母個人をも救ったかのように見えるが、「パリキヤリ」ではない専業主婦になったようにも見えるまどか母の姿は、女性の(幸福な)社会進出はいかにして可能か、という現代社会の最大の問題の一つに対して、単純に楽観的な解答を提示しないとも読め、この痛烈な皮肉・批評をどう受け止めるかが『まどか』によって視聴者に突きつけられる問いであると述べられた。

次いで、コメントーターの上尾氏によってコメントが提示された。まず、今回のシンポジウム全体に見られた問題意識を上尾氏は、日本「アニメ」というジャンルの特異性を無時間的・本質主義的にとらえるアプローチではなく、「(日本の国民性)云々とか」「日本神話伝統」云々ではなく、むしろ「戦後」日本の歴史の紆余曲折に伴走するものとして「アニメ」のダイナミズムに眼差しを向ける種類の問題意識であったと、指摘した。上尾氏の充実したコメントにおいては、主に足立発表に関連しては、「傷つかない身体」から「傷つく身体」へという図式は、そのうちに、戦前日本の「喪」の過程の不全や、傷の象徴化の再開・失敗といった諸要因を含むより複雑な構造と歴史を帯びているのではないかという論点、また、主に齋藤発表に関連しては、国民・市民形成の「神経症」モデルから「倒錯」(傷つき・かつ・傷つかない)としての「戦闘少女」への変化として『まどか』が戦後日本の歴史において画期のひとつと位置付けられるのかどうかという論点、そして、主に川口発表に関連しては、「まどか」における「再帰的→ヘテロ的→レスビアン的」という連帯の展開には、「ケアワーカーの搾取」という隠れたテーマがゾンビ的・サディズム的なものとして貼り付いているのではないかと論点などが、豊富かつ緻密に指摘された。また上尾氏は、「2010年代はいかに締めくくられるか?」という問いとともに、ポストアポカリプス作品かのようにどこかそうでもない作品「ケムリクサ」とは?という興味深い問いをもコメントの最後に掲げられた。

上尾氏から発表者への質問にくわえて、フロアの参加者からもメールでさまざまな質問が受け付けられ、登壇者からの応答がなされた。「キャラ」というものはアニメに固有な近年の発明なのか、それともそうではないのか、という質問にたいしては、そうとらえられる面があると同時に、当然たとえば『更級日記』なりに遡って考える面もあるという応答があった。第一次世界大戦にかんする各国での同時代の文学における表現などについて関連しての研究の必要を提起する質問もあった。そもそも『まどか』という作品事例とこのシンポジウムの「最終戦争」というテーマとの関連性はどのように考えるべきかという質問にたいしては、必ずしも『まどか』作品終盤部についてのみ「最終戦争」というモチーフが関係するととらえるものではなく、家庭の崩壊や女性間格差といった形象で表わされている、どこでも攻撃が起こりうる前線のない戦争、どの勢力に加担するかではなく戦争状態へとすべてを動員する戦争という種類の認識が非写実主義的に含まれているのではないかとコメントがあった。またアニメの作品内で少年兵的なイメージが描写されることに何らかの倫理的疑問が呈される場合があることについても質問

があり、アウトサイダー・アートなどの事例に言及しつつ表現の自由の重要性についてのコメントがあり、また、各地域・国によって(および各芸術ジャンルによって)頻度の高い表現手法・頻度の低い表現手法が異なることにこそ異文化との交流の知的文化的意義が存しているという点や、日本の少年マンガ的表象文化の裾野の広さという点、グローバル化とは物事の基準の単なる均質化のことではないとの点を指摘する発言があった。

高度な見識と豊富な話題が相次いで語り出され、盛会裏にシンポジウムは終了した。今世紀に入ってアニメ作品・文化の存在感が大きな高まりを見せるなか、学問的なアプローチの進展が強く俟たれる状況において、ひとつの新しい出発点を記すシンポジウムとなったように思われる。今後さらに共同的な研究の発展が期待される。

(文責:川口 茂雄)

これからの活動

シンポジウム

「子育てと社会」関連シンポジウム 「アタッチメント理論に基づく親子関係支援： 日本での実践と今後の展望」

日時：2021年1月14日(木) 16:30~17:30
場所：甲南大学18号館3階講演室+オンライン開催
企画：森 茂起(甲南大学文学部)
講師：北川 恵(甲南大学文学部)

ライフプラン教育シンポジウム

日時：2021年1月21日(木) 15:00~
場所：オンライン開催
企画：森 茂起(甲南大学文学部)
講師：小山 茂喜(信州大学教職支援センター)、荒井 英治郎(信州大学教職支援センター)、柘 千晶(信州大学教職支援センター)

第2回「九鬼周造記念講演会」シンポジウム

日時：2021年3月4日(木) 15:00~17:00
場所：オンライン開催予定
担当：川口 茂雄(敬称略)
講師：串田 純一(早稲田大学非常勤講師)
※甲南大学図書館との連携を予定している。

甲南アトリエ

「第11回親子孫子で楽しむアート ～不織布を染めてアレンジしてみよう」

2020年12月25日(金)よりYouTubeにて動画公開中。
2021年2月5日(金)15:00~16:00に上記動画を参考に投稿された作品をシェアリングする会をオンラインにて開催予定。
企画：内藤 あかね(甲南大学人間科学研究所/客員特別研究員)
講師：棕田 三佳(美術家)

「『光る家』をつくろう」

日時：2021年1月25日(月)受け付け開始
企画：服部 正(甲南大学文学部)
講師：森 太三(美術家)

研究会

「R・J・バーンスタイン『暴力』オンライン公開研究会 ——暴力と暴力のトラウマについての哲学的再検討」

日時：2021年2月12日(金) 13:00~16:00
場所：オンライン開催予定
企画：川口 茂雄(敬称略)
講師：齋藤 元紀(高千穂大学人間科学部)、大森 一三(東京学芸大学教育学部)、川口 茂雄(甲南大学文学部)、梅田 孝太(上智大学非常勤講師)、大久保 歩(大阪大学博士課程)
※後援：法政大学出版局

発行年月日:2021年2月18日

編集後記

今年度は、非常に厳しい年になりました。活動の模索すらできない時期が長く続き、夏ごろからようやく活動の方法を検討できるようになったため、活動の多くが秋~冬にずれ込みました。初めてづくしのオンライン開催をいろいろと試行錯誤しながら進めました。来年度も恐らく同様の状況になるかと思われそうですが、今年度の経験を活かし、参加者の方により満足していただけるように邁進してまいります。

